日本医史学雑誌　第68巻第4号（2022）　350–357

# 医史学と私

山内　一信

東員病院院長／名古屋大学名誉教授／藤田医科大学名誉教授

「医史学と私」というタイトルで原稿の依頼を頂いた．自身の医史学における足跡を述べることになるが，歩いてきた道を振り返る良い機会と思ってお引き受けした．自分本位の内容の記述になってしまったが，東海地域の医史学の状況を知っていただく機会にもなるかと思っている．

## 1．医史学への歩み

著者が医史学へどのように踏み入れたのかを記述するにあたり，東海地域における医史学会関係の事項を表に記述する．この中には著者の関係した研究歴も含めた．2022年現在継続して研究会が開かれているのは伊藤圭介文書研究会のみである．

**表**　東海地方における医史学界の歩みと著者との関係事項

1951年（昭和26）伊藤圭介曽孫伊藤　宏氏により伊藤圭介本家に伝わる圭介遺品が東山植物園に寄付された
1967年（昭和42）第17回日本医学会総会　名古屋（会頭 勝沼精蔵）
1967年（昭和42）3月　第68回日本医史学会総会（於田辺製薬営業所，会長 戸苅近太郎）
1971年（昭和46）6月　エーザイ「内藤記念館くすり資料館」（館長 青木允夫）設立
1971年（昭和46）12月19日　**東海蘭学の会**（会長 杉本　勲）発足
1972年（昭和47）11月23日　**江馬文書研究会**（会長 杉本　勲）発足
1973年（昭和48年）東海医学史研究会（会長 岡田　博）発足
1975年（昭和50）11月15日　**浅井国幹顕彰会**準備会開催（代表 高木健太郎，船橋茂吉，矢数道明）
1977年（昭和52）5月　第78回日本医史学会総会　於くすり博物館（会長 岡田　博）
1980年（昭和55）東山植物会館が建設され，会館内に伊藤圭介記念室が開かれた
1981年（昭和56）**伊藤圭介文書研究会**（代表 末中哲夫）発足
1982年（昭和57）4月　**飯沼慾斎研究会**発足
1984年（昭和59）4月　第85回日本医史学会総会　於名古屋大学鶴友会館（会長 酒井　恒）
1989年（平成元）6月　**名古屋医史談話会**（世話人 山内一信・山田英雄・髙橋昭・奈倉道治・日比野進）発足，第1回例会が開かれた
　1990年　著者「統計的にみた天保期名古屋の医師像」（日本医史学雑誌）掲載
　1990年　著者 名古屋大学教授就任
1991年（平成3）**洋学史学会**設立（会長 佐藤昌介）
1995年（平成7）2月　『伊藤圭介日記』第一集『瓊浦游紀』が出版された
1995年（平成7）4月　第24回日本医学会総会　於名古屋（会頭 飯島宗一）医史学展示も開催
1995年6月　第96回日本医史学会総会・学術大会開催　於愛知県医師会館（会長 日比野進，副会長 奈倉道治，青木國雄，準備委員長 山内一信）
　1996年（平成8）年9月　第22回日本診療録管理学会　於名古屋国際会議場（会長 山内一信），カルテの歴史を展示
　1996年3月　著者「不破家華岡流手術記録の検討」（日本医史学雑誌）掲載
　2004年（平成16）著者 日本医史学会評議員
　2007年（平成19）3月　著者 名古屋大学退職，4月　藤田医科大学教授
　2012年（平成24）4月　東員病院・認知症疾患医療センター院長
2019年（平成31）第30回日本医学会総会　於名古屋（会頭 齋藤英彦）著者は「医学史展～近代医学の幕開けから現代まで～」の委員として参加
2019年（令和元）5月　第120回日本医史学会総会・学術大会　於ウインクあいち（会長 山内一信）

著者の個人的関連事項は1文字分，下げてある

著者は1969年（昭和44）名古屋大学医学部を卒業した．卒業後どの医局に入ろうかと思案していたが，これからはコンピュータの時代と思い，当時，心電図自動診断の研究を行っていた第一内科循環器病教室に入局した．コンピュータ学を学ぶことによってがんとか，難病などの分析が可能になるのではないかと言うことをおぼろげながら考えていた．心電図自動診断については師の安井昭二先生，岡島光治先生ら諸先輩の指導もあり，ある程度マスターできるところにいたり，米国ミネソタ大学に留学し，さらに心電図分析方法の研究を行った．帰国後は安井昭二先生と先輩の渡邉佳彦先生が山形大学医学部へ昇進され，病院カルテ部助手のポストが空くことになった．これからは診療録（カルテ）は医療情報分析の大事な資源と言うことで，コンピュータをやっている著者が選任された．ところが当時は会計処理のコンピュータが導入され始めたころで，まだまだ情報処理からは程遠い状況で，現物カルテをどのように永久保存してゆくのかが大問題であった．キャンパス内に保管場所を探すため，駆けずり回っていた．そうこうするうちに少しずつIT化が進み，医療情報部長に昇進してからは電子カルテシステム完成に向けて頑張った．そして2002年（平成14）に一応の電子カルテ化が完成した．

これらの経過中カルテ部に保管してある現物にかなり古いものがあると言うことを知った．昭和始めの頃からのカルテが全てではないにしても保存されていることがわかった．ちょうど1990年頃からInformed Consent（IC）の必要性が議論されるようになり，古いカルテを調べてICの分析・調査をした．結果的にはそういうことから少しずつ古いカルテに興味を持ち始めた．その頃天保五甲午年二月『医家姓名録』（鶴舞中央図書館蔵）があることを知り，調べようと言うことになった．これは先祖がこの姓名録に記載されていることがわかったからでもある．

そして1990年に「統計的に見た天保期名古屋の医師像」を日本医史学雑誌に発表した．こんなことが知らず知らずのうちに医史学に興味のある人たちに知れ渡り，入局している第一内科の先生から声がかかり名古屋医史談話会を立ち上げようと言うことになった．この発案者は日比野進先生（名古屋大学名誉教授（元第一内科教授））であった．また遠藤正治先生からは伊藤圭介文書研究会を立ち上げるのでそのメンバーになってほしいと言うことになった．こういうことが契機となって医史学に関する研究が少しずつ進むことになっていった．

名古屋医史談話会（後になって日本医史学会東海支部）は，会を立ち上げる時，会報は発行する，会費は取らない，演者には特に謝礼を払わないことなどが設けられた．会員の多くは日比野先生の教え子で歴史に興味のある人たちであった．当時，会費はなく，インターネットも充分でない中，情報伝達には葉書が必要であった．事務局を引き受けた自身の教室はある意味苦労したが，当時愛知県医師会理事の奈倉道治先生の協力で医師会館を使わせていただいた．事務局としては会報印刷，並びに案内が大変であったが，この会から得られる情報はコスト以上のものがあった．

また演者への依頼や交渉は，若輩者の自分からは難しいかと思われたが，日比野先生の力は絶大であった．日比野先生の名前を出すとほとんど断られる事はなかった．また先生は会報には細かいところまで目を通され，文章の書き方や校正の仕方にも言及され，小生にも貴重な勉強となった．この会報についてはさらに短くまとめ第120回医史学会総会・学術大会の時に参加者にDVDでお渡しした（https://nagoya.repo.nii.ac.jp/records/27080#/.YysNDnbP1EZ）．内容は宇宙の歴史から，世界の医学史関係，結核，町医の歴史などで，多士済々の方々によって講演された．小生にとっては大変勉強となった．そしてこの研究会は第96回日本医史学会総会・学術大会開催（会長日比野進）へとつながってゆく．ここでは小生の高祖父の残した華岡流手術記録の分析結果を発表した．著者にとっては医史学会でのはじめての発表であったが，その時の理事長であった蒲原宏先生からコメントがあり，「こういう発表は是非どんどんやってほしい，早く論文にまとめて発表してほしい」と言われた．このコメントは今でも鮮明に記憶し

**写真1**　第96回日本医史学会総会・学術大会で作成した郵便局図案印
名古屋市鶴舞中央図書館前の伊藤圭介像と名古屋城の金鯱を組み合わせた名古屋中郵便局図案印.

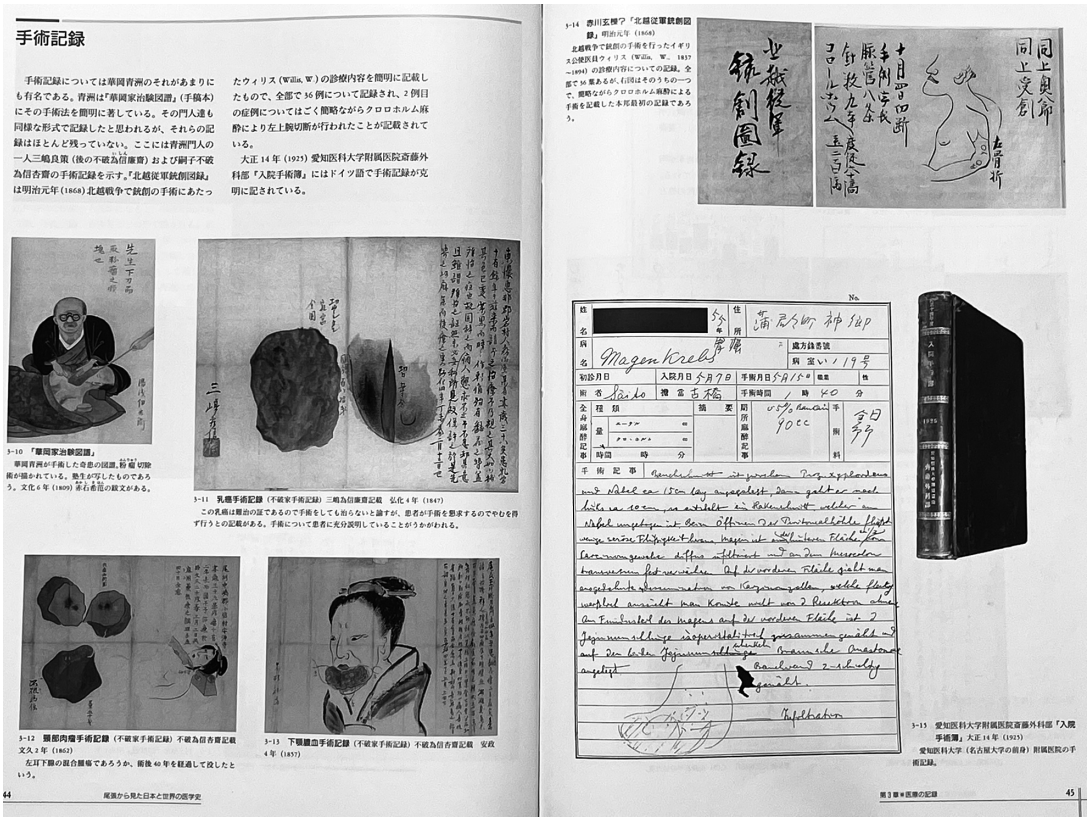
ている．この指摘は論文作成への意欲となり，翌年の日本医史学雑誌に発表した．

この学会で小生にとっての思い出は名古屋中郵便局図案印の原案を作成した事である（写真1）．名古屋市鶴舞中央図書館前の伊藤圭介像と名古屋城の金鯱を組み合わせた．またこの学会では不破家華岡流手術記録，くすり博物館などからの多彩な資料等が展示され，大変盛況であったと記憶している．

この第120回医史学会の2ヶ月前には第24回日本医学会総会（会頭飯島宗一）が名古屋で開かれ，総合医学展示の一環として名古屋国際展示場で医学史展示が開催された．髙橋昭先生を委員長として医史学展示小委員会がもうけられ（事務局は山内担当），医史学展示を開いた．内容は，西洋医学の尾張定着，医書からみた日本医学，医療の記録，医の倫理，生命科学の歩み，X線と切手，WHOの活動，名古屋の医跡などであり，これらの内容は『尾張から見た日本と世界の医学史』（1988年3月31日発行）にまとめられ発行された．医療の記録は，それまでの小生のカルテの歴史研究の総まとめとなった（写真2）．

その後日本医史学会を名古屋で開くことになる．第117回日本医史学会総会が広島で開かれた時，小曾戸洋理事長と坂井建雄副理事長から第120回大会をぜひ名古屋でやってほしいとの打診があった．その時すでに東員病院と言う個人病院の院長ではあるものの大学のように人手があるわけではなく，大きな学会を引き受けることは難しいと思っていたが，かつての大学の仲間たちに支援を頼んで引き受けることにした．タイトルは「医史学の新たな展開　健康長寿社会を拓いた先哲から学ぶ」とした．顧問には青木國雄先生，髙橋昭先生，プログラム委員長に橋本明先生にお願いし，伊藤泰広先生らに運営委員になっていただき，無事終えることができた．会長を引き受けることによって多くの人たちと知己になることができたし，もちろん医史学の幅を広げることができた．後藤新平のこともぜひ検証したいと思い，特別展示「後藤新平」ブースを設けた．これを契機となって新型コロナ感染症が流行った時，後藤新平のコレラの予防方法の素晴らしさをグレートジャッジというTV放送（2000年6月16日）でコメントすることになった．

さて伊藤圭介文書研究会の方である．これはほぼ毎月1回日曜日に研究会が開かれた．圭介の日記は大変字が読みにくく，苦労するところが多かったがある程度読解力はついたような気がする．何よりも圭介の生き様を知ることができた．圭介はあまり心情を表すことなく，日々の出来事を淡々と記述することが多い．その中から圭介の生き方を想像することになる．今まで解読したものの主なものは『瓊浦游紀』，『錦窠翁日記天保九年』，『伊藤圭介日記文久二年』，慶應4年，明治6から明治13年までの日記である．これらを含めて今までに発刊した『伊藤圭介日記』は全部で第27集までになる．瓊浦游紀，木曽日記，文久日記は



手術記録

手術記録については華岡青洲のそれがあまりにも有名である。青洲は『華岡家治験図譜』（手稿本）にその手術法を簡明に著している。その門人達も同様な形式で記録したと思われるが、それらの記録はほとんど残っていない。ここには青洲門人の一人三嶋良策（後の不破為信廉齋）および嗣子不破為信杏齋の手術記録を示す。『北越従軍銃創図録』は明治元年（1868）北越戦争で銃創の手術にあたったウィリス（Willis, W.）の診療内容を簡明に記載したもので、全部で36例について記録され、2例目の症例についてはごく簡略ながらクロロホルム麻酔により左上腕切断が行われたことが記載されている。

大正14年（1925）愛知医科大学附属医院齋藤外科部『入院手術簿』にはドイツ語で手術記録が克明に記されている。

3-10 『華岡家治験図譜』
華岡青洲が手術した奇患の図譜。粉瘤切除術が描かれている。塾生が写したものであろう。文化6年（1809）茶右番荒の絞文がある。

3-11 乳癌手術記録（不破家手術記録）三嶋為信廉齋記載　弘化4年（1847）
この乳癌は難治の症であるので手術をしても助からないと論すが、患者が手術を懇求するのでやむを得ず行うとの記載がある。手術について患者に充分説明していることがうかがわれる。

3-12 顎部肉瘤手術記録（不破家手術記録）不破為信杏齋記載　文久3年（1863）
左耳下腺の混合腫瘍であろうか、術後40年を経過して没したという。

3-13 下顎腫瘍手術記録（不破家手術記録）不破為信杏齋記載　安政4年（1857）

3-14 曲川玄輝?『北越従軍銃創図録』明治元年（1868）
北越戦争で銃創の手術を行ったイギリス公使医員ウィリス（Willis, W. 1837～1894）の診療内容についての記録。全部で36葉あるが、右図はそのうちの一つで、簡略ながらクロロホルム麻酔による手術を記載した本邦最初の記録であろう。

3-15 愛知医科大学附属医院齋藤外科部『入院手術簿』大正14年（1925）
愛知医科大学（名古屋大学の前身）附属医院の手術記録。

44　尾張から見た日本と世界の医学史

第3章■医療の記録　45

**写真2**　『尾張から見た日本と世界の医学史』内の「医療の記録」の一部である手術記録

医療の記録は，著者にとってはカルテの歴史研究の総まとめであった．不破家手術記録，北越従軍銃創図録，1925年の齋藤眞による胃がん手術記録などがまとめられている．

その時点での日記であり，その間を埋める日記はなく，その間の動静は分からず，他の資料から推測することになる．

圭介最大の功績の一つに『泰西本草銘疏』の刊行がある．その刊行への苦心は日記がないので分からないが，本の中でシーボルトの名を稚膽八郎（ワカイハチロウ）と記述したり，自費出版のため，多額の借用証文の存在から知ることができる．幕末維新時，圭介は洋学所の維持発展と医学校・病院の設立を望んでいた．洋学所については支援者ともいえる洋学所総裁の上田仲敏が，文久年間，圭介の蓄書調所出役中に没したことで洋学所の維持発展させることが窮地に陥った．尾張藩国学派と洋学派との対立が大きく影響した．『日本初の理学博士　伊藤圭介の研究』（土井康弘著，2005年11月6日，皓星社発行）．

一方，医学校・病院の設立については，種痘普及の牽引者であったことが役に立った．嘉永2年柴田方庵から種痘法を学び，嘉永3年自宅邸内に種痘所を開設，嘉永5年には尾張藩種痘所取締りとなり，普及に尽力した．この実績から明治3年には西洋医学講習所開設を藩に請願，明治4年5月の，名古屋大学医学部の前身となる仮病院，仮医学校設立への牽引役になった．これらのことは圭介関係資料から推測できた．

明治になり，東京に移ってからは，日記でその実情を伺うことができる．文部省出仕，小石川植物園出仕を命ぜられ，『日本産物志』，『日本植物図説』，『小石川植物園草木図説』などの刊行，第二回内国勧業博覧会審査官などで大活躍する．一方で子供の教育では心労があったようである．このような多くの功績から高齢であったにもかかわらずその意志の強さと並外れた馬力の凄さを伺うことができる．

このように圭介日記に関与することから圭介の研究者ということがある程度知れ渡り，名古屋市の市民講座などでの講演等を行うことがしばしばあった．また最近では「東海の肖像～日本近代植物学の父 伊藤圭介～」と言う番組で伊藤圭介に関してのテレビ出演もさせていただいた．

## 2. 東海地区における医史学関係の研究会のあゆみ

東海地方には1970年代に入って，いくつかの医史学に関係した研究会が発足した．それらを紹介する．

### 名古屋医史談話会（日本医史学会東海支部）

日本医史学会東海支部はその拠点を名古屋大学大学院医学系研究科 医療管理情報学教室に置き，平成5（1993）年6月から日比野進支部長を中心に運営を行ってきた．髙橋昭，奈倉道治，山田英雄，それに著者が世話人を務めた．もともと名古屋地区では，名古屋医史談話会が平成元（1989）年から開催されており，年3から4回，愛知，岐阜，三重の3県の中で医学史に興味のある同志が集って，医学史関連の講演を聞き，その都度，その内容を『名古屋医史談話会会報』にまとめてきた．講師は東海地方に在住の方が多いが，内容は東海地域関連の医学史のみならず，全国や世界的観点からの話もあり，その開催数は2006年（平成18）年8月の時点で39回に達した．

日本医史学会東海支部は圭介文書研究会とその研究会成果の発表会である錦窩翁日記出版記念会も後援している．支部が発足して以降の大きな行事としては第96回日本医史学会（会長：日比野進，副会長：青木國雄，奈倉道治，準備委員長：山内一信）が，1995年（平成7）に名古屋市中区の愛知県医師会館で開かれたことである．さらにこの医史学会の開催される2ヵ月前には第24回日本医学会総会が名古屋国際会議場（名古屋市熱田区），名古屋市国際展示場（名古屋市港区）で開催され，東海支部評議員の方々の協力で，医学史展示を行った．

### 伊藤圭介文書研究会

これはまさしく伊藤圭介曾孫 伊藤 宏の圭介遺品の植物園への寄贈が全ての始まりと言っても良い．遺品の修復，整理は植物園職員をはじめ，愛知県医師会，名古屋市医師会等々の協力を得て行われた．この中の日記は整理することによって240冊にまとめられ，その解読を行うことがこの会の目的となった．第1回の研究会は1980年4月が始まりであったが，諸般の事情で10年間中断，事実上，1993年（平成5）の研究会が始まりと言っても良い．最初の成果物は圭介日記の『瓊浦游紀』（文政10年圭介が長崎のシーボルトのもとで研究するため名古屋から長崎までの道中記録）の出版であった．この『瓊浦游紀』は第96回日本医史学会の記念品としても配られている．その後，研究会のメンバーの努力により研究会は毎月1度，日曜日に定例化され，必ず1年に1冊の発刊を行っている．令和4年の現在，明治14年1，2，3月を解読中で第28集として令和5年1月に発刊する予定である．

### 浅井国幹顕彰会

顕彰会は1975年（昭和50）1月26日に発足した．同年11月15日 浅井国幹顕彰委員会（代表高木健太郎，船橋茂吉，矢数道明）準備会が浅井家菩提寺の常楽寺で開催された．記念事業として顕彰碑の除幕式，記念文集発行，記念講演会（高木健太郎，吉川芳秋，矢数道明）などが行われた．浅井国幹は，明治初期まで永々として続いてきた漢方に終止符がうたれ，西洋医学が採用されようとした時，敢然とその流れに立ち向かい，漢方存続を訴えた人物である．しかし西洋医学の優位性には勝てず明治28年第八帝国議会において小差を持って漢医継続請願は否決された．国幹は先祖の墓前で「墓に告ぐるの文」（告墓文）を棒読し再興を願いつつも漢方の存続に幕を引いた人物である．浅井家は尾張藩医の試問，医学館薬品会などを開催し，尾張藩都督として尾張医学界を牽引してきた家柄である．

その後研究会は毎年11月3日に開催され，午前中に常楽寺本堂で法要が営まれ，国幹先生顕彰，

浅井家累代墓碑への墓参，午後から主に漢方に関連した談話会が開かれている．現顕彰会会長は伊藤嘉紀先生である．コロナ禍にみまわれ，顕彰会は開かれていない．

著者は顕彰会にはほぼ毎年参加している．これが縁であろうか，「浅井家七代の足跡」を『Bayer Booklet Series 48 医のふる里を訪ねる 続々日本の医史跡 20 選』（1999 年）に紹介した．

### 東海蘭学の会

1971 年（昭和 46）12 月 19 日，日本医史学会，蘭学資料研究会（蘭研）の会員関係者が愛知大学同窓会館に集まり第 1 回の会合をもった．会長は杉本勲であった．活躍した人物としては齋藤 信，吉川芳秋，青木一郎，安井 廣，川合彦充，岩崎鐵志，門 玲子，中沢 修，竹内孝一，田﨑哲郎，小池富雄，高木靖文，江馬庄次郎，茅原 弘，土屋重朗，青木歳幸らであった．蘭学資料研究会の支部的存在であった（岩崎鐵志ら：伊藤圭介日記の二五周年，『伊藤圭介日記第 26 集』伊藤圭介文書研究会編 2020）．

### 江馬文書研究会

1972 年（昭和 47）11 月 23 日に江馬文書研究会が発足した．最初名前が上がったのは 13 名で青木一郎，青木允夫，岩崎鐵志，片桐一男，門 玲子，杉本 勲，齋藤 信，末中哲夫，竹内幹彦，田﨑哲郎，富安広次，堀部 満，安井 廣らであった．この研究会の最大の業績は『江馬家来簡集』（1984 年 3 月 20 日出版）と『江馬細香来簡集』（1988 年 6 月 1 日出版）の発刊であった．前者には，江馬蘭斎，松斎，活堂，信成，賎男宛ての書簡が分析，収載されている．江馬蘭斎は美濃蘭学の開祖とされる．後者には蘭斎の長女である細香宛ての書簡と，江馬家家族の書簡が分析，収載されている．

### 飯沼慾斎研究会

1982 年 4 月，遠藤正治がリーダとなって飯沼慾斎研究会を立ち上げた．会長は水野瑞夫であった．1984 年 5 月 27 日「飯沼慾斎生誕二百年記念式典」を開催，飯沼慾斎生誕二百年記念誌編集委員会編『飯沼慾斎』の出版記念式典を開いた．慾斎研究会はほぼ年 2 回開催され，会報である「慾斎研究会だより」は年 4 回ほど発刊されている．飯沼慾斎は伊勢国亀山の出身で大垣の医家・本草学者である．リンネの植物分類法を採用した『草木図説』を刊行した．

## 3. 医史学研究から教わったこと

### 1）伊藤圭介の教え，「発見し，思いついた説は発表せよ」

『大生物学者と生物学』（篠遠喜人，向坂道治編著，興学会出版部，昭和 5 年 10 月 15 日発行）の伊藤圭介の項には以下のような記述がある．伊藤圭介翁は常に門人に対して，次のような意味のことを言うのであった．「すべて何物にても発見したり，考えついたりしたことはいかなる方法を以ても世に発表せよ．たとえその説の誤れることが後に明白になっても，論敵が互に学問的論争を戦はさんには，その結果学問の進歩を大いに進める事になる．一時は国辱的な論文なりと罵られてもよし唯胸に秘めて置くのみにては老いて必ず後悔すべし．一旦確信した上は自己の恥辱などを考えずに世界人類のために信念を発表することは大丈夫のなすことなり」と．同様の主張は圭介と親交のあった植物学者の『梅村甚太郎日記抄』（梅村 雪編集発行，昭和 61 年 12 月）にも記載されている．

同じようなことは野口英世も唱えている．野口英世は畑 嘉聞に以下のように語っている．「そして亦た一方に於て自己の意見或は仕事の概略でも発表すると，世間に於て其の問題に着眼をして居るものもある．或るものは賛成し或るものは反対して来る．其の多くの議論や研究が出て来ると自分の研究に対して大なる助けになる事もあり，亦た自分で気の附かなかった事柄も人からは教はることになる．其処で段々と雪達磨が大きくなって来るやうに物事が大成してくるのである．凡て大業は己れ一人では達し得らるゝものではない．其れは皆なの合成力によって出来あがる．そして結局月桂冠は最初の発表者の頭上に着せられる事になる．故に自分の所信の学説や研究して居る事柄

などは仮令間違って居つたとしても世間に持ち出すに躊躇する必要はない．（畑）『野口英世博士の面影』／『野口英世』（中山茂著，朝日新聞社発行，昭和53年7月20日）」．

両者に接点があったかどうかは分からないが，重要な指摘である．

### 2）成功には支援者の存在

偉人とされる人物の生き様をしらべてみると，勿論，先見性と達成するための強い意志は必須であるが艱難に向かいあった時にはそのバックには支援者の存在が必要である．

ジェンナーは痘瘡の撲滅という高い意志をもっていた．支援者はジョン・ハンターであろう．華岡青洲は麻酔なしで乳房の手術を行うというむごさを解決しようとして麻酔薬開発という高い意志を持って実験を重ね麻沸散を開発した．その過程は大変であったであろうが，母や妻の協力で麻酔下手術を成功させた．伊藤圭介は，本草学を学んでいた若かりし時，科学性の乏しい植物分類に物足りなさを感じていたであろう．そんな中シーボルトと出会いツンベルクの『日本植物誌』をもらい受けた．これこそリンネによる体系化された植物分類法であり日本に早く紹介すべきものと考え，325両もの費用を工面して『泰西本草名疏』として訳述・自費出版した．科学的思考と洋学の必要を強く感じ，広めなければとならないという強い意志の表れであり，支援者はシーボルトであろう．北里柴三郎は，伝染病の脅威から国民を救うという高い意志をもってコッホのもとで細菌学を学び，ジフテリアの血清療法を開発，さらにペスト菌発見などの業績をあげた．東大医学部との確執があったが，福澤諭吉の援助で伝染病研究所，その後北里研究所を設立，狂犬病などの血清開発に努めた．このように先哲を見てみると自分の使命に対して強い意志を持っており，達成すべきミッションを定めてそれに突き進んで行く．この道程は必ずしも穏やかなものではないが，それを助ける支援者が必要であることを物語っている．

### 3）二足の草鞋

著者が医史学に少しずつ踏み入れた経過は前項の通りである．しかし本職は医療情報部における病院情報システムの構築であり，大学院研究科・医療管理情報学における病院管理学の研究であった．医療情報部の仕事としては幸いにして2002年に電子カルテシステムが一応の成果を結び，その後は後進に道を譲った．大学院の方は14名の大学院生を指導しいずれも医学博士を取得させた．大学院生の研究テーマに医史学は含まれていない．この間，前述のように，医史学関係の事務局や研究などの仕事など結構多かった．ここで著者の悩みが生まれる．医学の歴史を調べる事は，本来の業務である病院管理や医療情報部の仕事とはかけ離れているのであまり目立たないようにして研究に従事した．当時国立大学ではマネジメント改革の嵐が吹き荒れ，教員は本職にきちんと従事しているかが問われていた．つまり医史学，これは当時としては副業にあたる仕事であった．この状態は名古屋大学を退官するまで続いた．幸い誰かがこの態度を批判する事はなかったが，芯から打ち込めると言う状態でなかった事は確かである．

今になって考えて見ると，著名な教授や研究者でも全ての時間を自分の専門だけに打ち込んでいたとは思われない．名古屋大学総長であった勝沼精蔵先生は自分の専門以外の仕事として伊藤圭介の顕彰に大きく貢献されている．だからそれぞれの専門分野の仕事や知識を生かしつつ歴史に打ち込めば良い．そのほうが専門分野もそれに関係する医史学にも深みも幅も出てくるのではないかと考えるようになった．今では杞憂に終わったことであったと思っている．

### 4）頼まれたことは断らない

医局に所属し，ある程度の地位を得た人は経験があると思うが，先輩あるいは師から原稿を書いてくれと頼まれることがあると思う．小生も助手時代，結構代筆原稿を頼まれたことがあった．いわゆる影の執筆者と言うことになる．当時はどうして本人に依頼された原稿を自分で書かないのだろうか，私自身も結構忙しいのになぜやらせるの

かなどと思ったことがある．しかし今となっては原稿を書くには，それなりの文献を読んだり，あるいは人に聞いたりして勉強することになる．これを契機に自分自身の知識なり実力を高めていったように思うし，あるいは共著者として世に知ってもらう機会にもなる．いずれにしろ依頼されたことは1度も断った事はなかった．

原稿の下書きとは違うが，自分自身に依頼が来ることがある．医史学会関係で言えば第120回日本医史学会会長を引き受けてほしいと言う依頼があった．医局を持たない今となってはこれは厳しいとは思ったがお引き受けをすることになった．幸い何人かの支援者，協力者の協力を得て，何とか成功裏に終えたと思っている．不十分な学会であったかもしれないがそれなりに勉強もするし，あるいは医史学会関係者との交流も深まりよかったと思っている．また医史学事典の編纂の場合においても編集担当および著者を依頼された．自分の専門ではない部分も多くはあったが，何とか調べたりして執筆することができた．これも知識，知見を広める良い機会であったと思っている．また青木歳幸先生から「尾張名古屋における伊藤圭介の種痘」についての原稿を依頼された．実のところ圭介の名古屋における種痘についてはそれほど資料があるわけではないことがわかっていたが，これもいろいろ調べてみる機会を得て大変勉強となった『天然痘との闘いⅢ，中部日本の種痘』（青木歳幸，W・ミヒエル編，岩田書院発行，2022年9月）．

依頼されるという事は自分自身が依頼されるだけのものがあり，それなりの知識や経験を積み，それに相当する人物と言うことで依頼されているのであって，むやみに断るものではないと思っている．

### 5）老は忘るべし また 老は忘るべからず

今では自由に医史学を研究できる環境である．もちろん本職をしっかりやった上での話である．何者にも気兼ねをする必要もないし束縛されることもない環境ではある．ところが新たに新しい課題に取り込もうとすると，体力的に厳しいものがある．視力の衰え，身体の衰え，思考力の衰え，気力の衰え，いずれも新規の仕事には厳しいものである．パワーポイントの図を一つ作るにも時間がかかりすぎるし，論文を読もうとしてもすぐ目が疲れてくる．

こんなことでは困ると思い健康寿命を伸ばそうと思って，デビッド・A・シンクレア著『LIFE SPAN 老いなき世界』を読んでみる．結局はDNAあるいは遺伝子は年と共に衰え，傷がついたり，修復が難しくなり老化を受けると言うことである．ただそれに対抗するためには，禁煙し，野菜，豆類，穀物主体の食事をとる，運動をする，放射線に被曝しないことなど，エピジェネティックシステムを強化することのようである．その一部については努めて行っているが，一方では遺伝子には設計寿命があるようで，いくら頑張っても設計された寿命には勝てないかもしれない．

とは言え少しでも元気に長生きし，できれば医史学に貢献したいと思っている．尾張藩重臣で俳人でもある横井也有の言「老は忘るべし また 老は忘るべからず」は心に響く金言である．

## おわりに

歴史とは決して過去だけのものではない．過ぎ去った歴史の上に立ってわれわれは生き，未来を造っている．個々の私たち自身は大きな存在ではないが，歴史を作り，未来を築く歴史の参加者でもある．このように考えると歴史学のもつ意味がいかに大事であるかがわかる．

医史学を研究する事は医史における事実を明らかにすることである．問題は，多くの研究者によって歴史的事実は明らかにされるが，その事実についての解釈は必ずしも1つではないことがある．解釈の中でイエスと言う人もいるし，ノーと言う人もいるかもしれない．しかしこれらの解釈も結局は歴史の中に吸収されてゆく．

こういう流れの中で，やはり私たちの役割は資料や文献をもとに忠実に事実を深く，正確に明らかにすることであろう．これらの事実に基づいて解釈がなされ，未来への生き方の指針ともいうべきものが生まれてくると思う．